

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00387

研究課題名(和文)「共生」を目指して伸長する文化表象間の「借用」「反復」のネットワーク

研究課題名(英文) Symbiosis through growing network by appropriations and repetitions

研究代表者

虎岩 直子 (Toraiwa, Naoko)

明治大学・政治経済学部・専任教授

研究者番号：50227667

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、「文学」と他の文化表象の借用関係を分析するという方法で、ひとつにはなり得ない他者同士(人間と環境、人間と非人間も含む)が互いの視点を尊重し、バランスの取れた共生を築く可能性を探ることを目的とした。初年度と2年目は視覚作品を「借用」することによって「視差」を露わにしている文学の役割についての考察を、所属国際文学会だけでなくヒューマニティとポストヒューマニティの学会で報告して論文を出版した。

Covid-19の蔓延以降、他者同士の対象を「健康・正常」対「病気・異常」へと絞った。「病気と芸術」というシンポジウムを開催し、最終年度には「病と芸術」という書籍として成果を出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究者は毎年(Covid-19慢延で中止になった2020年を除いて)国内外の国際学会での合計10回の口頭発表およびシンポジウムを通して、段階的に研究成果を英語で国内外に発信した。当該研究者が専門とするアイルランド文学だけでなく、スロベニアで開催された国際英語文学、韓国で開催されたヒューマニティ学会、日本で開催されたポストヒューマニティ学会で口頭発表を行うことにより、学術領域横断的に研究成果を発信できた。文学と視覚表象を分析対象として絞りながら、当該研究が様々な領域で意義ある研究であるという反応を得た、

Covid19慢延状況下では「病気」の他者との共生を訴え、書籍化した社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research project is to examine the networking practices (connecting and disconnecting) of beings. The project focused on the idea of parallax views as its conceptual frame and on adaptation, reference and translation in literature and art as its analytical view point. The result of this research hopefully revealed the necessity of recognizing and enjoying the different views between others, which leads to positive symbiosis between various others, including human and non-human.

This project has produced more than 10 presentations and two symposia in international conferences and one symposium organized by this researcher herself, involving both visual art and literature scholars. Main discussions have been published in academic periodicals and the fruit of the art/literature symposium mentioned above was published as the book titled 'Illness and Art'.

研究分野：文学と視覚芸術を中心とするイギリス諸島の表象文化

キーワード：現代アイルランド文学 借用 他者との共生 病気と芸術 ポストヒューマニズム エコクリティシズム シネード・モリシー 文学と視覚表象

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 20世紀末以来進展したグローバリゼーションはモビリティ・スタディーズや移民学を多方面に発展させてきた。技術的にさらなる可動性を追求して科学技術は発達し、モビリティが行き届いていない社会は努力を要請される、というように実践的なモビリティ追求が進展している。そして具体的移動手段の発達に伴う社会模様や心理の研究が、J. Urry等の先駆的研究以来活発化して(The Tourist Gaze, 1990, Tourism Mobilities. Places to Play, Places in Play, 2004など)日本でも場所・移動・旅行論は、経済学、社会学、文化研究領域で注目されている吉原直樹、塩原良和など)。さらに、移動によって当然新たに生じる異他混合状況において、地理学者David HarveyやDoreen Massey (For Space, 2005)などの著書で提唱する異他共同体間に行き交う眼差しの偏り、それゆえに共生に必要な他者への想像力がキーワードとなってきた。

(2) そのような状況で他者の眼差しを認識する仕掛けとして、「視差」が現代思想潮流のなかで注目され初めて久しい。ポスト・コロニアル研究隆盛の中、「視差」は社会学や文化人類学の分野で観念装置として頻繁に使用されてきたし、とりわけ、柄谷行人によるカントとマルクスについての考察への適用(『トランスクリティーク』1998)に触発された思想家Slavoj Žižek(ジジエック)の大著The Parallax View (2006)出版が「視差」への関心を一気に強めた。今や、哲学・社会学・文学の様々な人文科学領域(例:一橋大学教授・中山徹「大西洋横断的視差」, 2011)、心理学(例:京都大学霊長類研究所による比較認知発達研究, 2009)・認識学・地理学、国内外を問わず、絶えず移動・変化している対象を多元的に考察することの必要性を強調する文脈で重要な概念及び物理的装置となっている。

(3) ところで、ジジエックの大著の分析対象がほとんど文学作品であることは、文学作品がある特定の個人による社会的事実の産物であり、歴史社会学を概観ではなく個人の視点から見ていくことに意味があるからで、作家個人の立ち位置が明らかな状況で視差を検証していくジジエックの作法は、文学や芸術が「視差」を踏まえた共生に向かうべき人類、世界に果たす役割の重要性を示唆している。よって、「視差」観点から世界文学に注目している研究(The Cosmic Time of Empire: Modern Britain and World Literature by Adam Barrows, 2010)や、日本の作家研究(位田将司による横光利一研究など)でも視差分析を行っているものもここ数年の間に多数出ており、作家自身「視差」に着目した制作も、様々な表象芸術領域で多く見受けられようになってきた。

(4) また、本研究のもう一つの着目点「変化し続ける」という世界状況認識についての学術的背景をなすのは、生成の哲学を展開したジル・ドゥルーズのリゾームやアッサンブラージュという観念装置であり、ドゥルーズに影響を受けながら実践的な政治哲学The Figure of The Migrantを2015年に出版したThomas Nailが主唱するKinopoliticsという政治学であり、文化的な観点からはエコクリティシズムという批評領域である。ネイルは、これまで静止状態を基本と見たうえで展開を見たりベラリズムやマルキシズム、多文化主義などを、動的状態が社会の基本状況になったという観点から見直さなければならないと論じているが、再び国家集団に閉じようとしている2016年以降の世界を考察していく上で示唆的なものを多く含む。また、ドゥルーズが示唆する「他者との相互否定的な結合も積極的な結合」も可能性として持つ生成変化する

世界の中での他者結合は、環境世界との肯定的な関係を視野に展開するエコクリティシズムとも結びつくが、本研究者はそこに着目していく。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、文化表象がグローバル化していく現代世界で果たす倫理的役割を示唆することである。本研究者は、ネイルのkinopoliticsに倣って、変化生成し続ける状況を意識ながら、その状況の意味に焦点を当てる表象活動のエッセンスをkinopoeticsとする。パフォーマンス的要素を含んだ詩活動をkinopoeticsとする場合もあるが、様々な個体が「変化し続け」新たなネットワークを形成すべく、地下茎のようなものを多方向に伸ばしている地球世界で、その動きを意識しながら動き自体の表象を目指しながら作者が創り出していく文学や視覚芸術作品の共通項を、本研究者はkinopoeticsとする。そして、kinopoeticsが人間同士の異他関係の「共生」のみならず、人間と環境の「共生」も含めて、他者との肯定的バランスの必要性を示唆するところに、現代文化表象のある部分が持つ倫理性を指摘する。

## 3. 研究の方法

「借用」されるものと「借用」により生成されるものとを、それぞれの歴史社会状況、読者・観客の状況、及び、読者・観客へ届く形を可能なかぎり現地に赴いて資料を集め調査分析、また当該地の研究者と意見交換する。ポップカルチャーや現実の事件を借用している作品(その逆も)を多く扱うので、資料の性格上、現地に赴くことが有効である。とくに本研究初年度30年度は半年間の海外研究許可を職場から許可されており、4月から6月末まではオーストラリア・クイーンズタウン大学を拠点として、The Legend of Ned Kellyのヴァリエーションについて、口承、漫画、Sidney Nolan作品を初めとする様々な視覚表象資料を取材して、Peter CareyのTrue History of Kelly Gangs (2005)が一節をなすりZoomの広がりを検証する。7月から9月末まではアイルランド、イングランド、フランス(パリ)で作家へのインタビューを含めて資料収集する。研究経過は、本研究者が毎年参加発表している国際アイルランド文学学会(30年度はオランダ、ナイメーヘン大学)と隔年開催でここでも継続的に発表している国際英語文学学会(30年度はLjubljana大学,Slovenia)で発表して、研究者と意見交換する。本課題研究の最終年度には国内外の研究者・実作者を招いて、一般にも開いたシンポジウムを開催して研究経過と結果を公表する。3.どこまで明らかにしようとするのか:モリッシーの詩作品が「借用」する絵画・映画・テレビ・ブログ上の表象物、及び読者との間に生成していくネットワークの意味を環境倫理への広がりを考慮しながら明示する。ケアリーのKelly Storyの同様な広がりを検証する。E. ドナヒューの作品Homeと元になった「事件」を中心としたネットワークを検証する。村上隆と『五百羅漢図』や宮崎駿や「武蔵伝説」、さらに現代詩歌に見られる「借用」に言及し、現代地球世界での「共生」の可能性を探る「ネットワーク」生成を明らかにする。

## 4. 研究成果

(1) 2018年度は いずれも査読ありの以下3論文 ‘Sinead Morrissey's Parallax View’, ‘Connections to form: Influences, assemblages, and imitation in Sinead Morrissey's poems’, ‘The Human Image in the 21st Century: Network Images in Visual Arts and Sinead Morrissey's Poems’を英語で出版して、北アイルランド出身の英語詩人Sinead Morrisseyの詩を分析して、当該研究課題の借用による「視差」「ネットワーク生成」の状況を明らかにした。それぞれ英

語文学国際学会（スロベニア）、アイルランド文学国際学会（日本）、Humanityについての国際学会（韓国）における口頭発表に基づいたものであり、積極的な反応を得た。

（2）2019年度も国際学会での発表を3度行ったが、大阪で開催されたPosthumanities in Asia conference: Theories and Practicesで発表した‘Sinead Morrissey's poems: As beings in the World’という論考が、ポストヒューマニズムを先導する論者のひとりRosi Braidottiに非常に好意的に受け取られた意義は大きい。

（3）2020年度は「シネード・モリッシーの『詩の弁護』--Modest Witness, not Invisibleとして。」という査読付き日本語論文で、環境との関係のバランスが崩れていく世界における芸術や文学の倫理的役割について論じ、学術的領域を含む社会一般への芸術の役割を確認した。

（4）2021年度、前年度より新型コロナウイルス感染症が蔓延し、自然や環境と人間の関係についての反省が様々な領域でひろがり、「格差」をはじめとして他者との違和が深まっていった。当該研究者は本研究の締めくくりとして、「視差」「共生」という枠組みで「病気」と「芸術」の関係を考察するシンポジウムふたつに関わった。まず、国際アイルランド文学学会日本支部でのシンポジウム“Mental, Physical, and Social Illness in Irish Writing”で「健全」「非健全」の視差を露わにする契機としての「病気」について論じた。さらに発言者を視覚芸術、日本文学、英語文学の領域から招き、本研究費を使用して「病気と芸術」というタイトルでシンポジウムを開催した。オンラインで行なった「病気と芸術」の参加者は150人を越え、社会発信の役割をある程度果たせた。

（5）2022年度は前年度のシンポジウムを『病と芸術』（東信堂）として出版して、当該研究課題の成果をさらにひろく発信することができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 虎岩 直子	4. 巻 13
2. 論文標題 シネード・モリッシーの「詩の弁護」--Modest Witness, not Invisibleとして。	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明治大学大学院教養デザイン学科 紀要『いすみあ』	6. 最初と最後の頁 63-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 虎岩 直子	4. 巻 第87冊
2. 論文標題 「借用」という反復による「アサンブラージュ」が啓く共同体及び環境世界との調和	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『明治大学人文科学研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 89, 126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 虎岩 直子	4. 巻 第87冊
2. 論文標題 「借用」という反復による「アサンブラージュ」が啓く共同体及び環境世界との調和	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治大学人文学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 89-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Toraiwa, Naoko	4. 巻 25
2. 論文標題 Sinead Morrissey's Parallax View	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 SECL Studied in English and Comparative Literature	6. 最初と最後の頁 293-308
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Toraiwa, Naoko	4. 巻 XXXIII
2. 論文標題 Connections to from: Influences, assemblages, and imitation in Sinead Morrissey's poems	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Irish Studies	6. 最初と最後の頁 72-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Toraiwa, Naoko	4. 巻 11
2. 論文標題 The Human Image in the 21st Century: Network Images in Visual Arts and Sinead Morrissey's Poems	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治大学大学院強要デザイン科紀要「いすみあ」	6. 最初と最後の頁 83-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 虎岩 直子	4. 巻 14
2. 論文標題 Sinead Morrisseyの「場」の意識--水のイメージを辿る	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 明治大学大学院強要デザイン科紀要「いすみあ」	6. 最初と最後の頁 59, 85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 Naoko Toraiwa
2. 発表標題 Balancing on the Border: Poems by Sinead Morrissey
3. 学会等名 International Association for the Studies of Irish Literatures (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Naoko Toraiwa
2. 発表標題 Symposium 1: “Mental, Physical, and Social Illness in Irish Writing: Anna Burns, Louis MacNeice, and Sinead Morrissey”
3. 学会等名 International Association for the Studies of Irish Literatures Japan Branch (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 虎岩 直子
2. 発表標題 「健全だったもの」が解けていく - シネード・モリッシーの病気詩
3. 学会等名 「病気と芸術」シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Naoko Toraiwa
2. 発表標題 Balancing on the Border: Poems by Sinead Morrissey
3. 学会等名 IASIL (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Naoko Toraiwa
2. 発表標題 Clinical Task of Sinead Morrissey's Poems (Illness and Literature symposium)
3. 学会等名 IASIL Japan (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Naoko Toraiwa
2. 発表標題 "If the little well made, intricate machine of a poem can connect to a different well-made intimate machine, . . . " : Sinead Morrissey's emphasis on the body of poems
3. 学会等名 Canadian Association for Irish Studies 2019 Conference ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naoko Toraiwa
2. 発表標題 Sinead Morrissey's poems: As beings in the World
3. 学会等名 Posthumanities in Asia conference: Theories and Practices ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naoko Toraiwa
2. 発表標題 To Bear Witness to the Balanced and Imbalanced Mechanism of the World: Sinead Morrissey's On Balance
3. 学会等名 International Association for the Studies of Irish Literatures ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toraiwa, Naoko
2. 発表標題 "He becomes half-man, half-vine, asphyxiating": Sinead Morrissey's Kinopoetics
3. 学会等名 CISLE (Center for the International Studies for Literatures in English) ( 国際学会 )
4. 発表年 2018年



1 . 発表者名 Toraiwa, Naoko
2 . 発表標題 "in fact everything regains its equilibrium": Sinead Morrissey's Balance in her Historical and Spatial Network
3 . 学会等名 IASIL (International Association for the Studies of Irish Literatures) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Toraiwa, Naoko
2 . 発表標題 The Human Image in the 21st Century: Network Images in Visual Arts and Sinead Morrissey's Poems
3 . 学会等名 5th World Humanities Forum (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Toraiwa, Naoko
2 . 発表標題 "If it's life that controls the geological machinery of the planet" : Sinead Morrissey's Poems from a Perspective of Posthuman-Ecocriticism
3 . 学会等名 IASIL (International Association for the Studies of Irish Literatures) (国際学会)
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 Toraiwa, Naoko
2 . 発表標題 The translation of Silence in Contemporary Poetry in Ireland, Symosium I: "Silences and the Silenced in Irish Writing"
3 . 学会等名 IASIL Japan (国際学会)
4 . 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 岩野卓司、丸川哲史編 共著者の一人として虎岩直子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 378
3. 書名 野生の教養--飼いならされず、学び続ける	

1. 著者名 中村高朗編著、相馬俊樹・谷川渥・丸川哲史・虎岩直子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 136
3. 書名 病と芸術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------